

きます。父母にも宇宙に関わる人が少なくなく、ちょうど今（2007年11月）、月の周回軌道に乗った人工衛星“かぐや”のプロジェクトの担当者もいます。エンデバーのクルー全員が学校に来てくれたこともあり、宇宙的な話題には事欠きません。このように、自称“宇宙に一番近い学校”です。

最後に、2000年の最初のEarthKAMに参加した生徒のうちの海外生I君の感想文を紹介します。

あれは去年の夏休みだった。僕がロンドンへ行っている時母親に電話したら、「大竹先生から電話があった」と言われた。それが、事の発端だった。

日本に帰ってから詳しいことを聞くと、それは、エンデバーへ自分達が撮りたいと思う場所のリクエストをすると、その場所を撮ってくれるというもので、日本ではたったの5校しか参加できていないのでとても貴重なプロジェクトだった。その作業もなかなか単純ではあったのだが、単純であるがゆえに結構大変だった。というのも、スペースシャトルの名前の通り、これは宇宙を飛んでいる乗り物である。それから地球を撮ってもらうということである。とすると、並大抵の速さではなくなる。1秒で何十キロも進んでしまう世界なので、経度・緯度をかなり細かく調べなければいけなかった。その上、カメラは固定なので、ある一角しか写すことができない。ということは、シャトルの軌道から撮る場所がずれているともちろんその場所を写すことができない。などなどの色々な困難の中撮影ポイントの設定がなされていた。

この他にも、本番と同じようにシミュレーションを何回もやらされた。このシミュレーションはアメリカの時間で行われているため、日本では真夜中となる。そう、僕たちは何回もそれも平日学校で眠い目をこすりながらこのシミュレーションを行ってきた。やっと打ち上げと思っていたら、シャトルに問題がみつかったということで延期になってしまった。

2回目の打ち上げの日、今度は時間通りにシャトルは宇宙へむけて発射していった。もちろんこの時は、学校で気の知れた仲間と一緒に打ち上げの様子をテレビの周りを囲んで見ていた。この時はやっと上がってくれたと何かほっとしていた自分だったが、よく考えてみるとこれから本番であった。でも、その後のリクエストや位置の設定は今までのシミュレーションのおかげかそうでないかはよくわからないが、問題なく進んでいくことができた。

このような貴重な体験ができて光栄だったと思う。確かに平日夜中に学校へ行ったり、放課後何回も残ったりして場所の設定や、経度・緯度を調べるなど大変ではあったが、それにもまして、終わったときの充実感は大きかった。別に宇宙が近い存在になったわけではないが、宇宙に対する自分の考え方は、少しは抽象的なイメージから、現実的なイメージに変化したような気がする。機会があったら、今度は地球を撮ってもらうのではなく、自分の目で宇宙から地球を眺めてみたいと思う。

田代 淳一（たしろ じゅんいち）

茗溪学園中学校高等学校 教務部長・教員（化学）



茗溪学園では前向きで明るく逞しく積極的な青年が育っています。

「有名大学に行きたいから勉強する」のではなく、「中学・高校時代にいろいろな事に挑戦し、失敗し、考え、自分を探して、自分で自分の将来をみつけ、自分で歩んでいく。その方向が地球を救い、人類の未来を拓く方向であってほしい。」そう考え、支援するのが茗溪学園の教員の役割です。

海外生・帰国生が自分の力で自分の未来を切り拓いてきた経験はここで開花します。

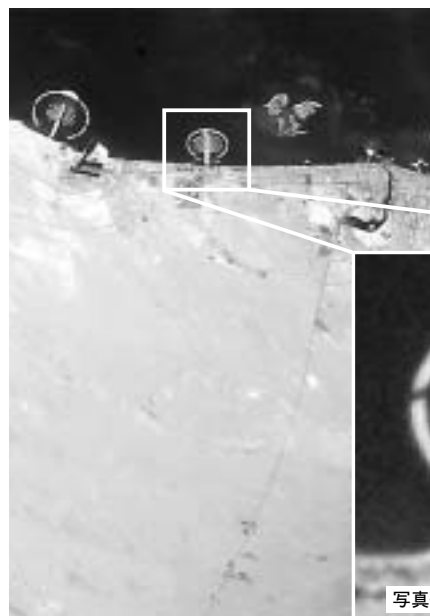


写真-2 宇宙ステーションからのドバイの写真
（2005年10月）



写真-3 写真-2の拡大：ドバイの人工島



写真-4 宇宙メダルと孵化を比較するSMOC隊員

今回のリポートは、
本校情報教育部長大竹隆夫先生への
インタビューをまとめたものです。

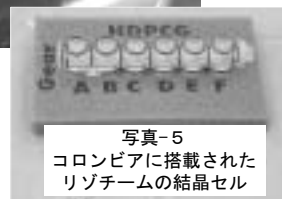


写真-5
コロンビアに搭載された
リソチームの結晶セル

茗溪学園中学校高等学校

〒305-8502 茨城県つくば市稲荷前 1-1
TEL. 029(851)6611 (代) FAX. 029(851)5455
www.meikei.ac.jp



「自分の目で宇宙から地球を眺めてみたい」というI君の希望は、茗溪学園での活動経験を通して「現実的な」夢に育ってきました。I君も、星出先輩のように「夢を実現する」ために努力を惜しまないと信じています。

茗溪学園は、研究学園都市つくば市にある地の利を生かして、「宇宙」だけではなく、他の多くの分野の「生徒の夢に一番近い」学校のようなです。田代先生、野次馬的お願いですが、星出さんがなぞラグビーボールを宇宙に持って行くのか、そのわけを来年4月までに紹介してください。